

# ワーズワスにおける出会い損ねの存在論： ヘーゲルとーともにー出会う可能性

騎 馬 秀 太

## 1. ワーズワスの Egotistical Sublime : ヘーゲル批判との関連で

ハズリットやキーツ以来ワーズワスに付き纏う「egotistical sublime」という表現は、孤独に逍遥するなかで自らの内面に沈潜してゆき、そこから立ち上がってくる想像力、超越論的なヴィジョンによって世界をまなざす詩人の姿を的確にあらわすものである。しかしながら他方でワーズワスが、精神の自然や他者との出会い、関係性を描いた詩人であることも事実であり、客体に寄り添うそのような詩人像が、エゴイスティックな詩人像と相容れないように思われるのも確かである。こうした違和感は批評史においても根強く、例えば Jones は *The Egotistical Sublime* (1954) のなかで、ワーズワスの「egotistical sublime」は単独者を多様な他者との関係性、共同性のうちで常に語るものであることを示し、この表現が直接指示するような個的な自我への引きこもりや唯我論とは違うという議論を行っており、同じような仕方でも Garber (1971) も、ワーズワスを他者との出会いの詩人として描いている。

ただそれにも関わらず「egotistical sublime」という表現が未だに払拭されていないのは、単に読者の側の怠慢によるものであるとは必ずしも言えず、「語り出された他者との関係が、本当に純粋な関係性であり、主体によって都合よく描かれたものではない」ということが果たして言えるのだろうかという（多少とも神経症的な）反応が、ワーズワスを論じると常に生じてしまう、そのような懷疑を誘発する側面が少なからずワーズワスにはあるということによるのではないと思われる。要はそれではあまりにも「うまく行きすぎている」という感じが拭い去れないのである。そして実は同じような反応が、ポスト構造主義の思潮がヘーゲルに批判を向けるときに嗅ぎつけている「胡散臭さ」においても見られることに、ここでは注目したい。ヘーゲルは『精神現象学』の本編を「感覚的確信」つまり未だ即自的なままの存在からはじめ、そのような直接的無媒介の存在が精神の純粋な否定性により自己の外に出て他者となる（も

しくは他者と媒介、関係し)、最終的に完全に充足した絶対知として自己に回帰する形で終えている。しばしば教養小説にも例えられるこのような精神の成長物語は、Paradise (楽園) → Paradise Lost (失楽園) → Paradise Re-gained (復楽園) といったナラティブによって一般化され、さらに方法論的には弁証法、否定の否定といった用語によって精神がたどる運動が理解されているように思われる。しかしワーズワスにおいてと同様にこの時間問題となってくるのが、充足した自己へと帰還する精神はその道程において、果たして本当に自己の外に出て、他者と出会っているのかどうかということである。自己疎外や他者への開かれといった表現は、自己否定の身振りによって上辺だけ取り繕った偽善、綺麗に地均しされ最終的には勝利が決まっている精神のための出来レースといった可能性によって我々に警戒を促すのだ。例えばドゥルーズは以下のように述べている。

ヘーゲルは《理念》における特異なものと普遍的なものとの真の関係のかわりに、個別的なものと概念一般との抽象的な関係を用いる。したがって彼は、《表象＝再現前化》という反省されたエレメントに、つまりたんなる一般性にとどまっている。彼は、諸《理念》をドラマ化するかわりに、いくつかの概念を表象〔上演〕＝再現前化する。つまり彼は、質の演劇、質のドラマ、質の運動をつくるのである。ヘーゲルは、そのような無理解におのれの弁証法を基礎付けるため、そして、彼自身の思考の運動でしかなくまたその思考に含まれるいくつかの一般的なものの運動でしかないひとつの運動のなかに、〔否定による〕媒介を導入するため、どれほど直接的なもの〔媒介されていないもの〕を歪曲し変質させているかを、わたしたちは知るべきである。(ドゥルーズ 1992, pp.31-32)

ここで言われている直接的なものが、ヘーゲルの精神の弁証法の外に本来的に存在する他者として措定されていることを考える時、いかにヘーゲルが他者を精神の自己運動に回収することで、他者の他者性を歪曲し、本来的な意味での他者と出会い損なっているかということが見えてくるように思われる。私と他者、主体と客体の関係性を語りだすことはこのように、他者を鏡として偽りの相互性を語るようなことにもなりかねないということであろう。その時実際はそこに「私」しかいないのに、見せかけの共同性がつくりあげられることになる。

このような批判に晒されているヘーゲルとワーズワスを重ねても、到底良い

結果は生まれそうにないわけであって、例えば Jarvis は *Wordsworth's Philosophic Song* (2007)において、Abrams や Hartman、そして de Man などの影響のもとワーズワス研究に根強いヘーゲルとワーズワスのアナロジカルな比較は避けるべきであるとしている。しかしながらいわゆるイェール学派の超越論的ワーズワスの系譜から外れるような経験論的ワーズワス読解においても、主体と客体のあいだの「関係性」に言及することはほぼ定石であると言ってよく、例えば “The Preface to *The Excursion*”における “How exquisitely the individual Mind...to the external World is fitted: — and how exquisitely, too...the external World is fitted to the Mind” (LL.63-68)に依拠する形で、超越論的な精神の自立性を否定しつつ、精神と自然との経験的次元での必然的相互交感を指摘するようなことになる。いまここで引用した Preface においても、精神の内側と外側の自然とが区別化されていることからわかるように、ワーズワス自身がまずは主体と客体という二元論を前提とした上で精神と自然との「関係性」に焦点をあてていることに鑑みれば、ワーズワスとヘーゲルのアナロジーがそれほど容易に取り扱うことの出来るものではないことがわかるだろう。そして第一に、「胡散臭さ」を取り扱うのに、ただ蓋をするだけでは十分でなく、それでは余計に怪しさを増長する形となってしまう。本当に払拭したいと思うのなら、避けるのではなく、「胡散臭さ」の根源としっかりと向き合うことで、その疑いを晴らす必要があるだろう。したがって本稿はこうしたアナロジーを避ける道はとらず、敢えて両者を並べることにより立ち現れてくる可能性に焦点を当てていく。

## 2. 新歴史主義による批判：Alan Liuの分析を例に

「ヘーゲル－ワーズワス」のアナロジーを前提とし、マルクスによるヘーゲル批判の視座を共有する形でロマン派の「egotistical sublime」を現実、歴史からの逃避であると批判し、これを「Romantic Ideology」と名付けたのが McGann (1983)であるが、同じような新歴史主義的立場を共有する Liu (1984)は、Hartman (1962)のワーズワス読解が明かしているのは、後景である「歴史」と前景である「私」とのあいだ、中景に「自然」を置き、この自然を鏡とすることで歴史との対峙を避けつつ自己に回帰する詩人の姿であり、ラカンを援用しつつこれを鏡像段階的な世界であると論じ、このような世界では一見すると主体と客体のあいだの調和に満ちたバランスが保たれているようでいて、実際は精神による客観世界の支配が行われていると論じている。Liu によれば実際の歴史はこのような鏡像段階が崩壊する地点、ある種の象徴的審級（父、法）に

よって鏡に映る自分の姿がそれ以外の「他者」と同じようにひとつのシニフィアンでしかないということを主体が受け入れることによって開かれるものであり、つまりはラカンのいうところの想像界から象徴界への移行が条件となっている。

Edmund Burke などによって定型化されたフランス革命批判のうちのあるものは、非現実的な若者の理想によって歴史が破壊されるというレトリックを用いることで、フランス革命を想像界的に読み込むものであったといえるだろうが、Liu は実際の革命はそのようなナイーブな夢的世界とは程遠く、現実における象徴界的秩序をしっかりと理解していたとし、1790年7月14日、バステューユ襲撃の1年後に行われた Fête de la Fédération における「誓い」はその言説化によって、「王/父」というシニフィアンの代わりに「人民」というシニフィアンを置くものであったとしている。そしてここで問題となってくるのが *The Prelude* の六巻、ケンブリッジ在学中のワーズワスがアルプス登山に向かう途中にこの Fête de la Fédération と出会った際の描写のされ方である。

But 'twas a time when Europe was rejoiced,  
France standing on the top of golden hours,  
And human nature seeming born again.  
Bound, as I said, to the Alps, it was our lot  
To land at Calais on the very eve  
Of that great federal day; and there we saw,  
In a mean city and among a few,  
How bright a face is worn when joy of one  
Is joy of tens of millions. Southward thence  
We took our way, direct through hamlets, towns,  
Gaudy with reliques of that festival,  
Flowers left to wither on triumphal arcs  
And window-garlands. On the public roads—  
And once three days successively through paths  
By which our toilsome journey was abridged—  
Among sequestered villages we walked  
And found benevolence and blessedness  
Spread like a fragrance everywhere, like spring  
That leaves no corner of the land untouched.

Where elms for many and many a league in files,  
 With their thin umbrage, on the stately roads  
 Of that great kingdom rustled o'er our heads,  
 For ever near us as we paced along,  
 'Twas sweet at such a time—with such delights  
 On every side, in prime of youthful strength—  
 To feed a poet's tender melancholy  
 And fond conceit of sadness, to the noise  
 And gentle undulation which they made.  
 Unhoused beneath the evening star we saw  
 Dances of liberty, and, in late hours  
 Of darkness, dances in the open air.  
 Among the vine-clad hills of Burgundy,  
 Upon the bosom of the gentle Soane  
 We glided forward with the flowing stream:  
 Swift Rhone, thou wert the wings on which we cut  
 Between thy lofty rocks. Enchanting show  
 Those woods and farms and orchards did present,  
 And single cottages and lurking towns—  
 Reach after reach, procession without end,  
 Of deep and stately vales. A lonely pair  
 Of Englishmen we were, and sailed along  
 Clustered together with a merry crowd  
 Of those emancipated, with a host  
 Of travellers, chiefly delegates returning  
 From the great spousals newly solemnized  
 At their chief city, in the sight of Heaven.  
 Like bees they swarmed, gaudy and gay as bees;

(book 6 LL.353-398)

Liuの指摘するようにここでは“*We took our way, direct through hamlets, towns,/*  
*Gaudy with reliques of that festival, / Flowers left to wither on triumphal arcs/ And*  
*window-garlands.*”や、“*Among sequestered villages we walked/ And found*  
*benevolence and blessedness/ Spread like a fragrance eve-rywhere, like spring*”という

形で革命の祝祭的雰囲気色彩豊かな花々とその香りによって染めあげられ、現実には歓喜にみちた声をあげる人々の姿は華やかな自然のヴェールによって抽象化された形で描かれている。そして祝祭ではしゃぐ人々の声も“Where elms for many and many a league in files, /With their thin umbrage, on the stately roads/ Of that great kingdom rustled o’er our heads”というふうには、木の葉のさらさらとしたざわめきによって表現されることになる。Liu はこれを自然のヴェールによって歴史を隠すもの、すなわち叙事詩の田園詩による置き換えであるとしているが、方々の町々からパリへと派遣された人々が“Like bees they swarmed, gaudy and gay as bees”と表現されていることなどを鑑みると、繰り返される“Dances of liberty”もどこか収穫祭ではしゃぎ回るバッカスの祭りの様子と重なり合うものである。この時歴史は詩人のエゴを楽しませる自然の鏡によって、鏡像的世界のもとに回収されてしまう。すると“How bright a face is worn when joy of one/ Is joy of tens of millions”と言われる時、アクセントは“joy of one”に置かれているということになり、歴史は完全に詩人の「egotistical sublime」に取り込まれてしまうのだ。

Liu はこのような中景にある自然のヴェールをかき乱す後景の歴史の侵入を、ワーズワスたちが初めてモンブランと出会った際の描写（“That day we first/ Beheld the summit of Mount Blanc, and grieved/ To have a soulless image on the eye/ Which had usurped upon a living thought/ That never more could be.”）において、モンブランが田園詩の世界を“usurp”する様子（usurperとしてのナポレオンを暗示）に読み取っているが、こうした突発的な歴史の侵入も、やはりその後に続く“rich amend”によって“*There small birds warble from the leafy trees, / The eagle soareth in the element, / There doth the reaper bind the yellow sheaf, / The maiden spread the haycock in the sun, / While Winter like a tame’d lion walks, / Descending from the mountain to make sport / Among the cottages by beds of flowers.*” (book 6 LL.453 -468)という形で再び自然との鏡像段階へと回帰することになる。Reaperを中心として、小鳥と鷲、乙女とライオンが、一緒に束ねられ、その背後に隠れた過剰な意味の可能性を干し草を束ねるようにして牧歌的風景に回収してしまっているのだ。

そしてさらにこうした想像界への引きこもりによる歴史からの逃避は、六巻のクライマックスである想像力の唐突な顕現においても生じることになる。

Imagination!—lifting up itself  
Before the eye and progress of my song

Like an unfathered vapour, here that power,  
 In all the might of its endowments, came  
 Athwart me. I was lost as in a cloud,  
 Halted without a struggle to break through,  
 And now, recovering, to my soul I say  
 ‘I recognise thy glory’. In such strength  
 Of usurpation, in such visitings  
 Of awful promise, when the light of sense  
 Goes out in flashes that have shewn to us  
 The invisible world, doth greatness make abode,  
 There harbours whether we be young or old.  
 Our destiny, our nature, and our home,  
 Is with infinitude—and only there;  
 With hope it is, hope that can never die,  
 Effort, and expectation, and desire,  
 And something evermore about to be.  
 The mind beneath such banners militant  
 Thinks not of spoils or trophies, nor of aught  
 That may attest its prowess, blest in thoughts  
 That are their own perfection and reward—  
 Strong in itself, and in the access of joy  
 Which hides in like the overflowing Nile.

(book 6 LL.525-548)

Liu はここで“I was lost”から “our destiny”、そして “its prowess”へと、一人称単数から非人称の主語へと移行することで単独の詩人が集合的な歴史の主体へと眼差しを向けようとしていることを指摘しつつも、最終的に遠景の歴史へと向けられた視線はそこに “like the overflowing Nile”という形で自然によるヴェールを挟むことで、“Our destiny, our nature, and our home,/ Is with infinitude—only there;/ With hope it is, hope that can never die,/ Effort, and expectation, and desire,/ And something evermore about to be.”、つまり常に超越的なものとして、歴史を無限の彼岸へと押しやることになるとする。そして Liu はこのクライマックスにおける隠された歴史の内実がナポレオンの 1800 年の軍事作戦におけるアルプス越えであるとし、「usurper」としてのナポレオンに対する否定が、自然を

鏡にし、本来の起源である歴史を喪失した想像界を作り出すことになったとしている。こうしてワーズワスは自然との出来レース的な出会いによって、歴史との出会い損ねを隠蔽しているとされることになるのだ。

### 3. ワーズワスにおける出会い損ねの存在論

「歴史の終わり」。ヘーゲルの絶対知によって突然もたらされる絶対精神の現実化は、有名なコジェーヴのヘーゲル講義によってそのように説明され、戦後のフランス思想界に多大な影響を与えたが、これがいわゆるポストモダン思想全体が共有する反ヘーゲル主義的思潮の原因の一端を担ったことは間違いない。Liuの例に見た新歴史主義によるワーズワス批判も、絶対知のように突然立ち現れる想像力の顕現によって、すべてが精神の充溢のもとに統一した世界として現前するものとして描かれることで、歴史という概念が忘却の淵に落としこまれることに対する批判であると言えるだろう。

しかしそのことで逆説的に隠されてしまうのは、ドイツやイギリスにおいてフランス革命という歴史的事件に出会った人間は、そもそも初めからこの歴史に「出会い損なっていた」という事実である。さらに言ってしまうえば、フランス革命自体もヴァスチュー事件として勃発したものであり、これが歴史となったのは、遡及的眼差しによって事後的にその意味が同定された時点においてであることを考えると、フランス革命の能動的主体であったような人々にとっても、歴史との出会いはやはりつねに遅れてやってくるものであったと言えるだろう。つまり歴史概念それ自体が根源的に時差の構造を内在させているのである。Liuのように歴史を本来的でありながら自然のヴェールによって隠された起源であると措定することは、逆に自然のヴェールさえなければ直接的に歴史と出会えるかのような錯覚を生み、歴史が根源的に孕んだ「出会い損ない」の構造を隠蔽することになる。つまり歴史を失われた対象として物象化することで、歴史と主体との間に固定的な関係性を打ち立て、歴史それ自体と直接出会うことはそもそも構造的に不可能であるということを忘却してしまうのである。するとここで、ワーズワスやヘーゲルに向けられていた「他者との偽りの共同性を再演しているだけだ」というような批判の予先が、直接적出会いの幻想に取り込まれるようなこうした読みに逆に跳ね返っていくような現場を、我々は目撃することになるだろう。なぜなら「私」が直接出会えると予期して待っているような他者ほど、「私」に染め上げられた対象もないはずであり、そのとき描かれる出会いの軌跡は、それこそ胡散臭い出来レースとならざるを



得ないだろうからだ。そもそも本当の出会いの可能性はむしろ、直接出会える可能性を手放した時、つまりその不可能性を受け入れた時に生じるものであろう。つまり直接性の幻想を手放した時になってはじめて、精神は他者と出会うことが可能となると言えるのだ。

そしてこれこそが、ヘーゲルがカントの超越論的統覚と物自体の関係を、抽象化された主体と客体の固定的な関係として批判する理由と重なるものである。ヘーゲルが絶対知を語りだす時に、これを「egotistical sublime」による他者、客体の抹消であると批判する時に見失われているものは、彼が抹消しようとしているのが、実はこうして物象化された物自体としての歴史と直接出会うことそれ自体の可能性であるということである。Pippin (1989)や Žižek (1993)が指摘するように、ヘーゲルはカントの批判的試みを前-批判的形而上学への回帰によって無駄にしたのではなく、カントが固定化することでいまだに残されていた存在と知の直接的出会いという形而上学の夢、その亡霊を抹消しようと試みたと言えるだろう。『精神現象学』において、他の章と比較して絶対知の章が極端に短いことはしばしば、存在と知の間に存在する不可避的な時差を乗り越え、それらを強引に統一するために焦る精神の性急さであるとされるが、実際はそうではない。ここで精神が急ぐのはむしろ、精神の抽象化によって物自体が直接出会うものの可能性として規定される時に、この対象の可能性がじつはつねにすでに我々のもとにあったことを明かすことで、物自体との出会いの先に行くこと、物自体を通り過ぎることで、再び出会い損ねを再演することを意味している。つまりここにおいて出会い損ねは二重なのである。主体が物自体を直接経験することは不可能であるということ、そしてこの不可能の経験それ自体が可能となることも不可能であるということ。この二重性を二段間のプロセスに置き換えるとすれば、1. 他者との出会い損ね → 2. 出会い損ねた他者がすでに出会っていた他者として立ち現れることで明らかにされる、他者との直接的出会いの可能性との出会い損ね。

最後に本稿の結論として指摘したいのは、前述の引用のようにワーズワスの想像力が噴出するのも、二段階目、二度目の出会い損ねにおいて、可能性としての他者とすでに出会っていたことが明かされる地点だということである。Liuの分析はこの出会い損ねの二重性を見落とすことにより、二段階目を一段階目と取り違え、前批判的ヘーゲル像と同じようなワーズワス像、すなわち想像界に生きる詩人としてワーズワスを描き出すことになったのだと言える。しかし実際のワーズワスは、初めから出会い損ねを前提にした議論を行っている。例えばLiuが最初に歴史からの逃避の例としてあげた部分であるが、Liu自身

も指摘しているように、ワーズワスが13日にフランスに到着してから実際に祝祭を目撃したであろう日付けは16日であったことが想定され、前年の革命に出会い損ねたのと同じように、一周年記念の祝祭にも、じつはワーズワスは出会い損ねている。

また Liu が挙げた二つ目の例、モンブランとの出会いの描写の前連は以下のようになっている。

'Tis not my present purpose to retrace  
That variegated journey step by step;  
A march it was of military speed,  
And earth did change her images and forms  
Before us fast as clouds are changed in heaven.  
Day after day, up early and down late,  
From vale to vale, from hill to hill we went,  
From province on to province did we pass,  
Keen hunters in a chase of fourteen weeks—  
Eager as birds of prey, or as a ship  
Upon the stretch when winds are blowing fair.  
Sweet coverts did we cross of pastoral life,  
Enticing vallies—greeted them, and left  
Too soon, while yet the very flash and gleam  
Of salutation were not passed away.

(book 6 LL.426 -440)

自分の根源的な遅さ (belatedness) が歴史との出会い損ないを生んでいるという事実は、精神の歩みを速めることになる。興味深いのはこの箇所が、Liu がナポレオンの軍事作戦を読み込んだ先の想像力横溢の部分と、“march it was of military speed” や “fast as clouds are changed in heaven” などの表現によって重なり合うということだろう。つまりワーズワスはここですでに、自分をナポレオンと重ね合わせていたのだとも言えるのだ。ここでの詩人の速さの表現は獲物をねらう鳥、最大限に帆を張り突き進む船、そして最終的に “flash and gleam/ Of salutation”、つまり一瞬の閃光によって網膜に焼き付けられるような形で自然と挨拶を交わすというように、どんどんと加速しているが、それゆえに今回は遅過ぎるからではなく、速すぎるために、自然との出会いを即自的に経験す

ることができていない。これらを踏まえたうえでここに読み込むことが出来るのは、ドイツやイギリスのように遅過ぎることで歴史と出会い損ねた先の主体とは対照的に、ここではナポレオンのような「行動する歴史」それ自体が、速すぎるゆえに歴史と出会い損ねているという事態である。したがって出会い損ねの構造は、歴史概念それ自体が孕んだものであるということがここでは明かにされている。Liuのように歴史を固定的な彼岸として顕現するものとして指定する視座から、このような読みを導き出すことは出来ないだろう。

歴史が立ち現れる際に、能動的に行動する主体にとっても、その行動を眺めやり、そこに歴史としての意味づけを与える主体にとっても、出会い損ねが必ず生じる。歴史はあまりに遅く、そして同時にあまりに早くも訪れるからだ。*The Politics of Nature: William Wordsworth and Some Contemporaries* において Roe (2002) は、フランス革命に共鳴していたワーズワス、そしてコウルリッジ周辺の人間が自国とフランスとの戦争の際に抱いた感情を示すために、George Dyer の例を挙げているが、これは当時ワーズワスらが感じていた歴史との出会い損ねに伴う困惑を的確に表現したものである。

The friends of liberty approved and disapproved; they rejected; they rejoiced, and they wept. In the midst of an event new in the history of the world...they were divided, perplexed, confounded: always disposed to rejoice at the conquests of liberty, yet frequently mistaking, amidst the number, the suddenness, and the embarrassment of events, the tendency both of defeats and conquests. (Dyer, 207)

理念と現実のズレが、ここでは歴史に向かう際に常に生じる認識論的出会い損ねの構造、根源的な時差として描かれている。未来に達成されるであろう歴史的な出来事に向かって自分を投げ出した方がいいが、実はそれがただの早とちりであったことが発覚した。それゆえに彼らは“*embrassement of events*”を感じてしまうのだ。このような革命に対する困惑は、社会変革それ自体に対する希望を削ぎ、他者との出会いを放棄し、自己への引き籠もりを促すことになる。歴史はいずれ訪れるだろうが、そのために自分ができることなどどうせないのである。勝手にやってくれというような具合に、彼らは歴史の現実化を断念するのだ。やがてワーズワスとコウルリッジは、こうした自己中心的引き籠もりの傾向から人々を解放するために *The Recluse* を書こうと試みるようになるのだが、その時コウルリッジがこうした状況を“*a melan-choly picture of the present state of degeneracy and vice*” (*Table Talk* Vol.1 307)として表現していることには注

目すべきだろう。なぜなら Pippin や Comay (2011)も指摘するように、ヘーゲルにとっても、カントやフィヒテのように客体との出会いを無限の彼岸に先延ばしすることで超越論的な主体の自律性を確保しようとする試みは、自己に閉じこもることで他者との出会いを失った懐疑主義やメランコリーとして同定されているからだ。

ただしある意味でこれは、歴史と関わることでそれとつねに出会い損ねてしまう主体が追い込まれる、必然的性格であるとも言えるだろう。最初の引用においてもワーズワスは、祝祭的な雰囲気の中で“tender melancholy/ And fond conciet of sadness”(377-78)を感じていたが、ここで歴史との出会いのために先手を打つようにして進む精神にも“A deep genuine sadness”という同じような気分が訪れている。すなわちどちらの精神においても、歴史はたどり着くことのできない彼岸に押しやられているのだ。

しかしながら想像力の突然の噴出が生じるクライマックスの前で、決定的なことが起こる。ここに至って、旅の目的でもあり壮大で崇高なクライマックスとして予期していたアルプスの山頂を、詩人たちがすでに超えていたことが明らかとなるのである。

By fortunate chance,  
While every moment now encreased our doubts,  
A peasant met us, and from him we learned  
That to the place which had perplexed us first  
We must descend, and there should find the road  
Which in the stony channel of the stream  
Lay a few steps, and then along its banks—  
And further, that thenceforward all our course  
Was downwards with the current of that stream.  
Hard of belief, we questioned him again,  
And all the answers which the man returned  
To our inquiries, in their sense and substance  
Translated by the feelings which we had,  
Ended in this—that we had crossed the Alps.  
(book 6 LL.511 -524)

ここで起きている決定的な事件は、自分の遅さを自覚することで歴史との出会い

い損ねを一般化し、歴史を彼岸に遠ざける精神と、歴史を目標として措定し、その目標に向かって性急に行動するのだが、その実その速さによって歴史を歴史として認識することが出来ず、結果的にこれを無限の彼方に追いやってしまう精神、メランコリーに取り憑かれたこのような二つの精神が目指していたもの（歴史）がじつは彼岸ではなく、つねにすでにこちら側にあり、自分たちがそれにすでに出会っていたことを知るということである。ここにおいてこの事実を伝えるのが、*peasant*であったことは、Liu が指摘するような田園詩による叙事詩、歴史の隠蔽ではなく、歴史が孕んだ出会い損ないの真理を、歴史それ自体に明かす「他者」として田園詩、そして自然が描かれているということを明かしているだろう。そしてこれこそが先に述べた二段階目の出会い損ないなのである。したがってこの出会い損ないの後、絶対知の訪れと同じように突如として沸き起こる想像力は、自然の鏡によって自分だけを移す想像界的な「*egotistical sublime*」として読まれるべきではなく、自然の鏡によって、主体だけでなく、彼岸にあった歴史それ自体が自分自身をそこに認識するような地平として理解されるべきだろう。Hartman も指摘するように、アルプス越えが発覚したのちに突然挿入されるこの想像力論は、それまでの過去における現実描写を離れ、突如として作品を執筆中の詩人の眼差しが挿入されたものであると考えられるが、これは *The Prelude* という自伝的作品における過去と現在の必然的な時差を利用することで、未来時を現在へと到来させるための操作であるとも言えるだろう。そしてここで語られる希望の顕現は、希望（未来）がすでに訪れていたことを、アルプス越えにおける構造を反復することによって、重ねて我々に明かしている。この時、精神は失われた対象を追い求め続けることそれ自体を手放す。なぜなら失われたものをいつまでも失われたものとして規定していたのが自分自身であったことに気づかされるからだ。つまり出会い損なうことによって、自分自身で作り出した他者との失われた（という幻想に浸った）関係に固執していたことが明かされるのだ。そうではなくてむしろ、出会い損ないそれ自体と出会い損なう可能性、このような形で否定の否定を理解した時、逆説的に他者と出会う可能性が開かれるということをワーズワスはここで我々に示している。それは本来的な意味で、歴史、未来、そして他者へと可能性を開く身振りであると言えるだろう。

彼岸にある可能性としての他者を手放すこと、それは同時に超越論的なメランコリーの主体を乗り越えることをも意味している。それゆえ立ち現れる想像力によって詩人は自分を見失い（“I was lost as in a cloud”）、想像力は詩人の「私」から離れて、それ自体の運動によって未来から出来し（“lifting up itself”）、

同時に未来を予告するのだ (“before the eye and progress of my song”)。想像力の突然の出来ののち、場面は再び過去の描写にかえり、こう続いている。

The dull and heavy slackening which ensued  
Upon those tidings by the peasant given  
Was soon dislodged; downwards we hurried fast,  
(LL.549-551)

“dull and heavy”という表現が1850年版において“melancholy”となっていることにも注目すべきであろうが、ここにおいてさらに重要なのは、主体の予期が形作る他者との緊張関係が、ここでは二度緩んでいるということだろう。最初の弛緩は、アルプスとの出会い損ないを知らされることによる“slackening”、そして二度目はこの出会い損ないそれ自体が“dislodged”される瞬間である。動詞 dislodge は “To remove or turn out of a place of lodgement; to displace.” (OED) という意味をもつが、このことはまず、一度目の出会い損ない自体がひとつの固定的な“lodgement”として機能していたことを明かしつつ、こうした固定的関係それ自体が取り除かれる瞬間としての dislodgement を示している。これまでの議論と重ねて言うならば、ここでは超越論的なメランコリーの主体が「私」と「他者」の固定的な関係を手放すことで、本来的な意味で他者と出会うことができるようなひとつの舞台としての精神（想像力）が明かされていると言えるだろう。それゆえ山を下った先で詩人たちが出会う二律背反的現象（Tumult and peace, the darkness and the light）が、ひとつの精神（one mind）の働きのようだと言われる時、我々はそこに、他者たちの出会い損ないと出会いを、精神の運動として捉える詩人の眼差しを読み取るべきだろう。以上に見てきたように、ワーズワスが描き出す出会いは、他者との関係を（肯定的にであろうと、出会い損ないの対象として否定的にであろうと）安易に語りだすことが、得てして自分語りに陥ってしまうということを前提にした上で、そのような都合のよい関係性の叙述それ自体を手放す瞬間、つまり二重の出会い損ねによって生じるものであると言える。我々は、この微妙だが決定的に重要な手放しの瞬間に目を配りつつ、ワーズワスが一見すると唯我論的とも取れる出会い損ねの瞬間によって、逆説的に本当の出会いの可能性を開いているということを見失わないようにしなければならないだろう。自分語りの「胡散臭さ」を前に我々とともに眉を顰める詩人の姿が、その時立ち上がってきたならば、少なくともそこで我々は、詩人と出会う可能性くらいは受け取ったと言えるのではないだろう

## 参考文献

- Abrams, M.H. *Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature*. New York: Norton, 1971. Print.
- Coleridge, Samuel. *Table Talk*. 2Vols. Ed. Carl Woodring. Princeton: Princeton University Press, 1990. Print.
- Comay, Rebecca. *Mourning Sickness: Hegel and the French Revolution*. Stanford: Stanford University Press, 2011. Print.
- Dyer, George. *The Complaints of the Poor People of England, 1793*. Oxford: Woodstock Books, 1990. Print.
- Fry, Paul. *Wordsworth and the Poetry of What We Are*. New Haven: Yale University Press, 2008. Print.
- Garber, Frederick. *Wordsworth and the Poetry of Encounter*. Urbana: University of Illinois Press, 1971. Print.
- Hartman, Geoffrey. "A Poet's Progress: Wordsworth and the "Via Naturaliter Negativa" " *Modern Philology*, Vol. 59(3). (1962) : 214-224 . Print.
- . *Wordsworth's Poetry, 1787-1814*. London: Harvard University Press, 1987. Print.
- . *The Unremarkable Wordsworth*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1987. Print.
- Jarvis, Simon. *Wordsworth's Philosophic Song*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. Print.
- Jones, John. *The Egotistical Sublime: A History of Wordsworth's Imagination*. London: Chatto & Windus, 1954. Print.
- Liu, Alan. "Wordsworth: The History in "Imagination"" *ELH*, Vol. 51(3). (1984): 505-548 . Print.
- McGann, Jerome. *The Romantic Ideology: A Critical Investigation*. Chicago, London: The University of Chicago Press, 1983. Print.
- Miall, David. "The Alps Deferred: Wordsworth at the Simplon Pass" *European Romantic Review*, Vol. 9(1). 87-102. Print.
- Miller, Christopher. "Wordsworth's Anatomies of Surprise." *Studies in Romanticism*. Vol.46 (4). (2007): 409-431. Print.
- Pippin, Robert. *Hegel's Idealism: The Satisfactions of Self-Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989. Print.
- Roe, Nicholas. *The Politics of Nature: William Wordsworth and Some Contemporaries*. New York: Palgrave, 2002. Print.
- Warminski, Andrzej. "Missed Crossing: Wordsworth's Apocalypses" *MLN*, Vol.99(5). (1984):983-1006. Print.

- Wildi, Max. "Wordsworth and the Simplon Pass" *English Studies*, Vol.40:224-232. Print.
- Wordsworth, William. *The Thirteen-Book Prelude. 2.Vols.* Ed. Mark Reed. Ithaca: Cornell University Press, 1991. Print.
- . *The Excursion*. Ed. Sally Bushell, James Butler, and Michael Jaye with the assistance of David Garcia. Ithaca: Cornell University Press, 2007. Print.
- Žižek, Slavoy. *Tarrying with the Negative: Kant, Hegel, and the Critique of Ideology*. Durham: Duke University Press, 1993. Print.
- . *Less Than Nothing: Hegel and the Shadow of Dialectical Materialism*. London: Verso, 2012. Print.
- . *The Most Sublime Hysteric: Hegel with Lacan*. Trans. Thomas Scott-Railton. Cambridge: Polity Press, 2014. Print.
- コジエーヴ、アレクサンドル『ヘーゲル読解入門：「精神現象学」を読む』上妻精、今野雅方訳、国文社、1987年。
- ヘーゲル、G.W.F『精神現象学』榎山鉄四郎訳、平凡社、1997年。
- ドゥルーズ、ジル『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992年。